様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 5 月 31 日現在

研究種目：若手研究(B)
研究期間：2007～2009
課題番号：19730508
研究課題名（和文）　「語り」についての臨床教育学的研究 ― Langeveld の「コロンブス」を通して
研究課題名（英文）　A Clinical-Pedagogical Research on Narratives with Reference to Langeveld’s Columbus Test

研究代表者
西　隆太朗(NISHI RYUTARO)
（ノートルダム清心女子大学　人間生活学部　准教授）
研究者番号：70368679

研究成果の概要（和文）：教育や心理臨床の場で人が出会うとき、つねに交わされている「語り」をどのように理解するか、臨床教育学的な観点から次の研究をおこなった。(1) 教育学と臨床心理学との学際的な視点から、語りを解釈する方法論を検討した。(2) 保育園等で Langeveld の心理テスト「コロンブス」を実施し、その発展としてのフィールドワークをおこない、現場における臨床データに基づいて、解釈の方法論についての検討を進めた。

研究成果の概要（英文）：Narrative is the basic means of communication between people, whether in education or psychotherapy. The author investigated narrative from the viewpoint of clinical pedagogy, both methodologically and clinically. First, the interpretive methodology of narrative is explored in an interdisciplinary way, using pedagogical and clinical psychological approaches. Second, a field work was carried out with children in nursery schools and other subjects, using Langeveld’s approach to Colombus Test. The clinical data was useful to examine the interpretive methodology.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	2,000,000	0	2,000,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	420,000	3,820,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学・教育学
キーワード：「語り」、コロンブス・テスト、投影法、臨床教育学、解釈の方法論

１．研究開始当初の背景

(1)　臨床教育学について

教育・保育の現場も、心理臨床におけるカウンセリングの現場も、成長していく一人一人の人に実践家が出会う場所であることには変わりない。教育現場において、一人一人の子どもたちにどう出会うかという、関係性の視点がますます重要となるにつれ、教育学と心理臨床学の学際的な連携が進められている。しかし、この臨床教育学の構築は、端

緒についたところである。
　臨床教育学を提唱したのは、オランダの教育学者、M. J. Langeveld である。彼は自ら子どもに出会う臨床実践を重ねながら、彼の教育学的人間学を築いてきた。本研究も、このように教育学と臨床実践とをつなぐ流れを継承するものである。

(2)　「語り」の意義
　子どもと出会うとき、教育の場においても、心理臨床の場においても、基本的なコミュニケーション手段となるのは「語り」である。話の中に現れる事実の表層だけでなく、さまざまな情動的・無意識的意味を含めて理解することが、出会っている二人が信頼関係を築く上で必要である。しかし、語りを解釈する方法論は、R. Langs らの精神分析的アプローチをはじめ、心理臨床学において構築されつつあるものの、それを教育現場に活かしたり、教育実践の中で検証することはまだ十分になされていない。

(3)　「コロンブス」
　臨床教育学において解釈の方法論を構築していくうえで、Langeveld が子どもたちのために作った「コロンブス・テスト」は重要な示唆を与えている。彼が作ったこの心理テストは、心理臨床学における TAT をもとにした、＜絵を見てお話をつくる＞テストだが、一般の心理臨床学にはない特色を持っている。しかしこのテストについての研究は、彼以後ほとんどなされていない。

２．研究の目的
　語りを解釈する方法論について、Langeveld の臨床教育学と「コロンブス・テスト」を手がかりとしながら、教育学・心理臨床学を結ぶ学際的立場からの理論的検討と、実践的フィールドワークの両面から、研究をおこなう。

３．研究の方法
(1)　解釈の方法論について
　語りを解釈する方法論を構築するため、教育学・心理臨床学などの文献・資料を用いた検討・考察をおこなう。

(2)　コロンブスの実施
　コロンブスを実施し、研究のための基礎的なデータを得て、探索的な解釈をおこなう。大学生・大学院生への試行を重ねたうえ、保育園児をはじめとする子どもたちへの実施をおこなう。
（大学生・大学院生については延べ約 100 名に複数回の実施を、子どもたちについては約 20 名への実施をおこない、実施の様子を録音・録画し、逐語録の作成等をおこなった。また、実施に協力した大学院生らと、研究会を開いて共同でのプロトコル検討をおこなった。）

(3)　コロンブスに関する研究
　コロンブスのもととなった TAT との比較などを通じて、コロンブスの性質を明らかにする。

(4)　語りと関係性についてのフィールドワーク
　解釈の方法論について、フィールドワークによって実際に得られたデータからの検証をおこなう。コロンブスなどの語りから、語り手についての情報を得るだけでなく、語りを通じてどのような関係性が築かれるかという視点からの考察をおこなう。
（2008 年度・2009 年度に、約 30 回にわたって、保育園を訪問し、子どもたちの語りを聴くとともに、その様子を映像記録に収めた。）

４．研究成果
(1)　「コロンブス」における Langeveld の思想
　コロンブスは、古典的な心理テストである TAT をもとにしている。形式だけを見れば、図版の絵柄だけしか変わらないことになる。しかし、本質的な違いは、Langeveld の思想 ― より実践的に言えば、彼が子どもと関わる姿勢にある。文献を通して、またコロンブスの実施経験を通して、彼の姿勢や、それまでの心理臨床学との違いを明らかにした。
　いわゆる「心理テスト」が、被検査者の内面に焦点を当て、客観的理解のために関係性を一定限度の「ラポール」に留める傾向があるのに対して、Langeveld の姿勢は次のように、より人間的である。「子どもは、自分の世界を創造しながら、彼が生み出した彼の世界へと、われわれを導き入れるのである。…われわれが子どもの手を引き、子どもがわれわれの手を引いて、たえず続けられる創造の中で、子どもはその旅の間に、彼の世界と自分自身とを形作るのである」。ここには、臨床的な出会いを相互的なものと捉え、人格的に交わろうとする彼の姿勢が現れている。心の世界をともに自由に旅して、あらたな成長への契機を「発見」する ― そこに、「コロンブス」と名付けられた本来の意義がある。どんな図版かがこのテストを特徴づけるのではない ― Langeveld も、図版は自由に選んだり、別のものを使ってもよいと述べている。図版の種類や有無にかかわらず、そのような姿勢でかかわる実践が、コロンブスの本質だと言える。このような理解は、心理学を専攻していない学生たちとのコロンブス実

施や、保育園でのコロンブス実施・フィールドワークなどからも確認された（「M. J. Langeveld の投影法「コロンブス」について ― TAT との比較から」「M・J・ランゲフェルドの「コロンブステスト」における投影法理解とその意義について ―― 臨床教育学が心理臨床に示唆するもの」）。

(2) 解釈の方法論

Langeveld 自身によるコロンブス解釈においては、彼が発達的観点から重要と考えている視点への言及はあるものの、語りそのものを解釈するうえでの方法論的研究はなされていない。しかし、客観的な観察とは異なり、自ら関与する中で生み出される語りを理解するうえでは、何らかの方法論が必要だと考えられる。

関係性の中で生みだされる語りを解釈する視点としては、R. Langs らの精神分析的アプローチや、R. Haskell らの社会心理学的アプローチが、学際的に交わりつつある。治療者と患者との現在の関係性が、出会いの枠組みや状況を含めて、語りの中の無意識的意味として現れるという観点から、語りを詳細に解釈するものである。この方法論についての検証をおこなった。

患者の語りは、治療者の学派に影響されうる ― その学派において解釈しやすい語りが生みだされる可能性があることが指摘されている。そこで、Langs の精神分析的アプローチによって、異なる学派である体験過程療法の Gendlin の事例への解釈をおこなった。語りについての詳細な解釈により、異なる学派のデータにおいても十分な解釈力を持つことが例証された（「関係性の投影スクリーンとしての身体 ― フォーカシングにおける語りとその意味」）。

また、心理療法以外の場面 ― 保育実践・教育実践などにおける語りの事例を取りあげ、同様な解釈が可能であることを示した（「共時性 ― 関係の中で語りを聴く視点 ―」）。

(3) コロンブスの実施と解釈

大学生・大学院生への実施を通じて、このテストが Langeveld の言うような、創造的かかわりを可能にするものであることが示された。また、大学生たちは、「ラポール」のレベルを超えた「人格的な交わり」の経験を報告してくれたが、「心理テスト」「心理療法家」の枠組みにとらわれがちな心理臨床学にとって、こうした臨床教育学的かかわりが示唆するものは大きいと考えられた（「M・J・ランゲフェルドの「コロンブステスト」における投影法理解とその意義について ―― 臨床教育学が心理臨床に示唆するもの」）。

大学院生と共同でコロンブス実施を進める中で、小学生たちによる語りのプロトコルを得ることができた。多数のデータを得ることができたが、関係が発展しながら展開していく実施過程の詳細を踏まえると、プロットをパターンとして捉えるよりは、Langeveld の言うような個性記述的方法をとり、子どもの語る内容だけでなく、子どもと実施者との関係性の相を含めて理解していくことが必要だと考えられた。そのため、先述の方法論によって、実施者との関係性と実施状況を踏まえた、詳細な解釈をおこなった。Langs らの方法論が、主に面接室での自由連想を対象にしたものであるため、解釈にあたっては、個別の図版の性質を考慮した。

事例研究によって、現在進行しつつある語りの中に、語り手が感じている「背景としての安全感(background of safety)」のあり方を読みとることができた。こうした解釈は、教育・保育現場で子どもたちとの信頼関係を築くうえで有用だと考えられる。また、就学前の子どもたちにも、こうした語りを創造する力が十分にあると知ることができた（「投影法「コロンブス」の実施経験について(1)」）。

こうした経験をもとに、筆者自身が保育園を訪れ、子どもたちにコロンブスを実施し、その様子を映像記録とした。4～5 歳の子どもたちは、十分に豊かな物語を創造することができた。また、子どもたちの方から、その物語を絵に描きたいとか、何人かの仲間が集まってともに物語を創りたいといった提案をしてくれて、コロンブスをさらに発展させた「語り」を得ることができた。

(4) フィールドワークを通じた方法論の検討

これらの経験から、コロンブスについて新たな視点を得ることができた。①図版に対応するプロトコルだけがデータだと考えるのは、「心理テスト」にとらわれた狭い見方のように思われる。語りは図版を超えて、さまざまな行動・表現・遊びに展開する。その中で、図版だけを見ていたよりももっと深く広く、その子たちの心の世界を知り、関係を深めることができる。②子どもの語りに耳を傾けるためには、それが可能になるような、自由な関係性と自由な状況が不可欠である。その信頼関係が成立したとき、子どもたちは図版がなくても自然と語りかけてくる、その力を持っている。

そこで、保育園でのフィールドワークをおこない、子どもたちとコロンブス的な姿勢でかかわりながら、それを映像記録におさめた。映像記録についての解釈とその可能性について、ある事例研究を通じて論じた（「保育研究における映像記録の意義について ― ある出会いについての事例研究を通して

―」)。
　このフィールドワークから得られた事例や、教育・保育・心理臨床実践における事例を取りあげ、先述の解釈の方法論によって分析した。現在の関係性が無意識のうちに語りの中に現れるという考えが、ユング派の「共時性」の概念と結びつくものであることから、共時性概念の再検討と、その実践的意義を示した。共時性概念を導入することの意義は、解釈が単なる静的な理解でなく、実践家（治療者・教育者・保育者）のコミットメントをかけた解釈的行為である点だと考えられる（「共時性 ― 関係の中で語りを聴く視点 ―」)。
　Langeveld の臨床教育学的思想と、精神分析学・分析心理学をはじめとする学際的な解釈の方法論を結びつけてきたが、このような観点は、教育・保育実践を理解していくうえで有用であると考えられる。また、Langeveld は投影法を、子どもが未来を創造する「投企」と捉えているが、このような創造的関係性をフィールドワークによって実体験し、そこから得られた実践知に基づく事例研究をおこなうことができた。
　コロンブス実施によって得られたプロトコルや、保育園でのフィールドワークによる映像記録については、継続的な事例研究・方法論的研究をさらに進めていきたい。

５．主な発表論文等
〔雑誌論文〕(計 3 件)
①西　隆太朗. 保育研究における映像記録の意義について ― ある出会いについての事例研究を通して ― . ノートルダム清心女子大学紀要　人間生活学・児童学・食品栄養学編, 査読有, 第 34 巻第 1 号, 2010 年, pp. 46-50.
②西　隆太朗. M. J. Langeveld の投影法「コロンブス」について ― TAT との比較から. ノートルダム清心女子大学 児童臨床研究所年報, 査読無, 第 21 集, 2008 年, pp. 91-96.
③西　隆太朗・倉光美保. 投影法「コロンブス」の実施経験について (1). ノートルダム清心女子大学 清心こころの相談室年報, 査読無, 第 21 集, 2008 年, pp. 5-17.

〔学会発表〕(計 1 件)
①西　隆太朗. 共時性 ― 関係の中で語りを聴く視点 ― . 日本箱庭療法学会, 2009 年 11 月 15 日. 佛教大学.

〔図書〕(計 2 件)
①伊藤良子他編 『京大心理臨床シリーズ 9 心理臨床関係における身体』, 2009 年, pp. 78-87, 創元社. (担当部分単著：西 隆太朗. 関係性の投影スクリーンとしての身体 ― フォーカシングにおける語りとその意味.)
②藤原勝紀他編 『京大心理臨床シリーズ 6 心理臨床における臨床イメージ体験』, 2008 年, pp. 403-412, 創元社. (担当部分単著：西 隆太朗. M・J・ランゲフェルドの「コロンブステスト」における投影法理解とその意義について ― 臨床教育学が心理臨床に示唆するもの.)

６．研究組織
(1)研究代表者
西　隆太朗(NISHI RYUTARO)
ノートルダム清心女子大学　人間生活学部　准教授
研究者番号：70368679

(2)研究分担者
なし。

(3)連携研究者
なし。